

## 目指す地域像の意義と取り組み方

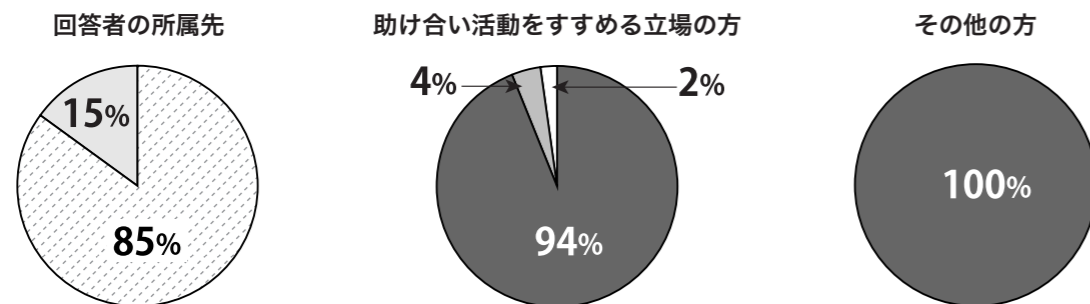
### 提言

助け合いの活動は、地域の困り事に関する生の声を体感・共感し、意識共有できた人達から生まれる。また、その共感を地域に広げていくためには、活動している人に光をあてた発信も必要である。多様性の時代に共有する地域像は多元的であり、それはエリアの範囲や時系列によっても異なるものである。

### 登壇者

【進行役】	齋木 由利氏	三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株) 経済政策部副主任研究員
【アドバイザー】	和田 敏明氏	ルーテル学院大学名誉教授
	井上 秀子氏	阿賀野市第1層SC
	斉藤 節子氏	南アルプス市第1層SC
	坂上 尚大氏	阪南市第1層SC
	清水 民樹氏	福津市第1層SC

アンケートの結果 参加者概数：124名 回答者数：104名



### 議事要旨 齋木 由利氏

本分科会では、目指す地域像を描き普及するプロセスについて、その具体的な取り組み方やそれによる効果・意義について、各パネリストからご発言いただき議論した。

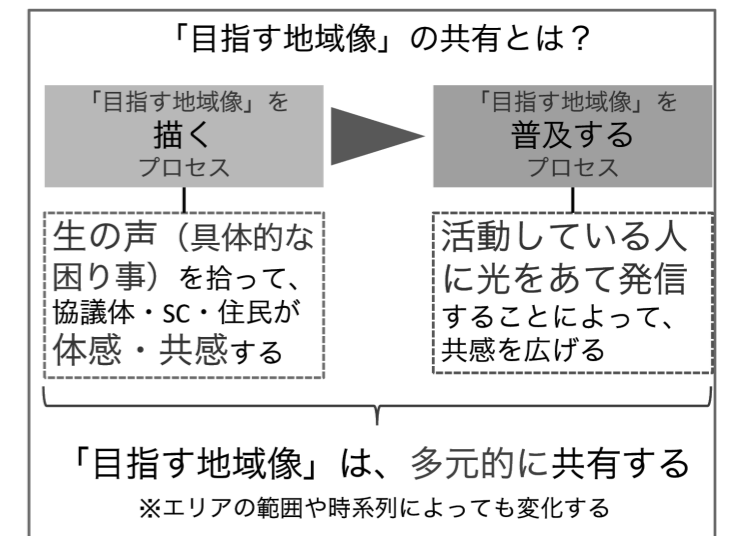
地域像を描くプロセスについて、各パネリストに共通していたのは、地域の具体的な困り事に関する「生の声」を、住民・協議体・SCが自ら体感・共感していた点である。南アルプス市では、日頃個別支援にあたっているCSWが協議体に加わり情報提供することで、「リアルなニーズ」が見え、具体的な活動につながっていった。阪南市においても、日常生活圏域において、住民による地域ニーズの聞き取り調査を行っている。福津市においても、SCが地域住民の声を直接聞くことを重視している。阿賀野市でも、協議体が地域の座談会で困り事の掘り起こしを行い、「寂しい」といった声から居場所づくりの活動につながっていった。アンケート調査では、客観化された情報を得られるが、例えば「買い物に困っている人が4割いる」という情報だけでは、活動の喚起にはつながりにくい。地域の「生の声」として、例えば「3件隣のおばあちゃんの腰が悪くごみ出しに困っている」という声を拾うことで、担い手が共感し活動につながるのではないかとの議論があった。

地域像を普及するプロセスについても、南アルプス市では寸劇、福津市では協議体通信、阿賀野市では地域づくりかわら版による情報発信を行っていた。その際、その活動による効果・変化を、活動している住民の姿に光をあてて発信することで共感を広げる、すなわち地域像を共有していくことにつながるのではないかとの議論があった。

アドバイザーからは、各パネリストの取組のポイントについて、上記のほか、協議体を設定

する際の柔軟な発想についてもコメントをいただいた。例えば、南アルプス市においては、小学校区単位の第2層協議体ではなかなか活動につながらなかったため、自治会単位の協議体を立ち上げることで、近所の個別のケースの困り事から助け合いにつながった。福津市においては、圏域単位の協議体に限定せず、テーマ別の協議体も設置している。確かに、近所のごみ出しの助け合いを議論するのと、通院・買い物の移動支援を議論するのでは、議論すべきエリアが異なるはずである。このような柔軟な発想で話し合いの場を設定することも重要との示唆を得ることができた。

「目指す地域像」という画一的なイメージを抱きがちではあるが、生活スタイルも価値観も多様な時代に、すべての地域住民がたった一つの地域像を共有することは難しい。しかしながら、助け合いに立ち上がった人達は、その前段階で同じ課題を体感・共感していることが分かった。「目指す地域像」は地域の中で多元的に共有するものであり、それはエリアや時系列によっても変化する、ということの本分科会として提案させていただいた。



\*進行役が本議事要旨のため作成した図表です

### ■ 寄せられた声から

- 協議体が組織化されていない私たちにとって自慢話の誇示も見られたが、阿賀野市井上SC、南アルプス市斉藤SCの講話、プレゼンは、平成27年4月からの地域の人々を主体とした第一協議体、第三協議体の活動で素晴らしい活動で、大変参考になった！
- 2層CO（生活支援コーディネーター）の活動（地域と共に）、地域に入るのは2層だと思う。